

創造都市における芸術 — 高松市美術館の試み

Art in Creative City: The Attempts of Takamatsu Art Museum

篠原 資明

Motoaki Shinohara

【発表要旨】

高松市美術館は、戦後間もない 1949(昭和 24)年、名勝栗林公園内に地方の公立美術館としては全国に先駆けて誕生しました。そして、瀬戸大橋が開通した 1988(昭和 63)年に、現在の市内中心街へ移転新築し、2016 年春、高松市美術館は約 1 年間の改修工事を経て、リニューアルオープンしました。「戦後日本の現代美術」「20 世紀以降の世界の美術」「香川の美術(工芸)」を軸として系統的に収集されてきた当館所蔵の美術作品は、1,600 点あまりにのびります。中でも質・量ともに日本屈指となった「戦後日本の現代美術」コレクションは、国内外で高い評価を得ています。

瀬戸内国際芸術祭など芸術の風に沸き立つ高松市は、創造都市を標榜しています。そのような都市において、当美術館は文化的な拠点としての役割を期待されているといえるでしょう。当館は、幸いなことに中央商店街に隣接しています。そのような利便性を生かして、できるかぎり開かれた美術館を目ざすべく、さまざまな試みをしてきました。今年は、現在の地に移転して 30 周年を迎えることもあって、さらに新しいことにも挑戦したいと考えているところです。そういった数々の試みの一端を紹介できればと思います。

【プロフィール】

1950 年香川県生まれ。1980 年京都大学大学院文学研究科博士課程修了。東京芸術大学専任講師、京都大学大学院教授などを経て、現在、高松市美術館館長、京都大学名誉教授、京都市立芸術大学客員教授、国立美術館運営委員。2010 年から 2013 年にかけて美学会会長を歴任。哲学者としては、あいだ哲学を提唱し、詩人としては、方法詩を提唱・実践する。また、1980 年代から現代アートの批評・展覧会の企画などにも携わる。主な著作に、『空海と日本思想』（岩波新書）、『差異の王国 — 美学講義』（晃洋書房）、『まず美にたずねよ — 風雅モダンへ』（岩波書店）など、主な詩集に、『サイ遊記』『平安にせずく』『空うみのあいだ』（以上、思潮社）、『物騒ぎ』『星しぶき』（以上、七月堂）など。